

メディア利用時間と子どものパーソナリティ要因との関連

菅原ますみ

1. はじめに

本プロジェクトでは、子どものパーソナリティ要因について、1) メディア接触（テレビ、ビデオ、テレビゲームなど）に直接影響する可能性のある要因の1つとして（Rentfrow, Goldberg & Zilca, 2010）、また、2) 本プロジェクトで検証を試みようとしている子どもの発達変数（言語・認知発達、社会性の発達など）とメディア接触との関連性の調整変数（moderate variable）や統制変数（control variable）としても重要なものであると仮定し、第1回（0歳）と第7回調査時（6歳）にパーソナリティ特性に関する測定を実施してきた。本報告では、6歳時点でのパーソナリティ特性とテレビ接触・視聴を中心としたメディア利用時間との関連について検討をおこなった結果について報告する。

2. 方法

* 調査時期、調査方法、調査対象は本報告書の「調査概要」（p.5～.11p）を参照。

* 子どものパーソナリティ特性の測定：

7因子パーソナリティ理論（Cloninger et al., 1993）に沿って作成された就学前の子ども用の the preschool version of the Temperament and Character Inventory（psTCI、全82項目、Constantino et al., 2002）の日本語版（Sugawara et al., 1999）から45項目を抜粋して使用した。Cloningerの7因子パーソナリティ理論では、パーソナリティを気質（temperament）と性格（character）とに大別し、幼少期から出現する遺伝関連性の高い気質的特徴をベースとしながら性格的特徴が自己意識の発達とともに成熟していく、というパーソナリティの発達の变化を想定している（Cloninger et al., 1993）。気質の4次元は、(1) 新奇性追求（novelty-seeking, NS、興奮しやすさや衝動性、無秩序性など行動の触発性に関する特性）、(2) 損害回避（harm-avoidance, HA、不安や人見知りなどの行動抑制に関する特性）、(3) 報酬依存（reward-dependence, RD、依存性や愛着、感傷性など行動維持に関する特性）、(4) 固執性（persistence, P、勤勉さや完全主義傾向など行動の固着性に関する特性）である。これらの4つの気質特性はそれぞれ、中枢神経内のドーパミン（NS）、セロトニン（HA）、ノルエピネフリン（RD/P）の神経伝達物質の分泌と代謝に依存しているものと想定されている。性格には3次元あり、(1) 自己志向性（self-directedness, SD）、(2) 協調性（cooperativeness, C）、(3) 自己超越性（self-transcendence, ST）である。今回の研究では以上の7次元のうち、より年長での発達が想定されている自己超越性を除いた6特性について測定をおこなった。

測定に用いた特性ごとの項目数は、NSは9項目（“決心する前によく考える（逆転）”、“たや

すくかんしゃくを起こす”、“何の決まりもないのが好きだ”など)、HAは9項目(“初めて会った人には人見知りする”、“新しいことをする前にすごく心配になる”、“慣れていない状況に置かれると心配になるようだ”など)、RDは8項目(“あまり自分の気持ちを他人と分かち合わない”(逆転)、“気持ちが混乱しているときは一人でいられない”など)、Pは6項目(“目的を達成しようとするとき、自分の限界にチャレンジする”、“時間のかかることだと最後までやりとげない”(逆転)など)、SDは6項目(“いつも目標をたててそれに向かって努力する”、“他の子より責任感が強い”など)、Cは7項目(“他人を助けることが好きだ”、“助け合うことが皆のためだとわかっている”など)である。信頼性係数(Cronbachの α 係数)を算出したところ、それぞれ、NS=.68, HA=.87, RD=.57, P=.78, SD=.78, C=.77という値が得られ、不十分な値を示したRDを除く5特性の得点を以降の分析に用いることにした。

3. 結果と考察

(1) パーソナリティの5次元の基礎統計

5つのパーソナリティ特性(3つの気質次元:固執性、新奇性追求、損害回避と、2つの性格次元:自己志向性と協調性)の男女別平均値を表1に示した。損害回避には有意な男女差がみられなかったが、新奇性追求は男子の方が、また固執性、自己志向性、協調性の3特性は女子の方が有意に高い得点を示している。

表1 就学前版 Temperament and Character Inventory (TCI) の男女別平均値

	性別	人数	平均値	標準偏差	t-値
TCI (固執性)	男	470	18.63	4.70	-2.80 **
	女	424	19.51	4.64	
TCI (新奇性追求)	男	469	25.18	5.31	2.35 *
	女	423	24.37	4.93	
TCI (損害回避)	男	468	25.27	7.72	-1.68
	女	422	26.10	7.08	
TCI (自己志向性)	男	469	19.03	4.35	-3.19 **
	女	420	19.94	4.13	
TCI (協調性)	男	467	25.88	4.13	-4.05 **
	女	421	26.96	3.74	

*: $p < .05$, **: $p < .01$

(2) メディア利用時間との関連

6歳時点でのテレビ、ビデオ、テレビゲーム、読書の4つのメディアの利用時間および屋外遊び時間との相関係数を表2に示した。各特性ともごく弱いながらも有意な相関がみられ、テレビ利用時間では損害回避性の高さと接触および視聴時間の長さとの間に関連がみられている。反対に、固執性と自己志向性では同様にごく弱い負の関連がみられた。

映像接触(テレビ、ビデオ、テレビゲーム)の総利用時間との関連をみると、損害回避とは正の、また固執性、自己志向性、協調性とは負の関連が見られた。

表2 子どものパーソナリティ変数とメディア利用時間との関連 (6歳時点、相関係数、N=894)

	テレビ(接触)	テレビ(視聴)	ビデオ	テレビゲーム	映像接触	読書	屋外あそび
固執性	-.09*	-.09*	-.02	-.08*	-.10**	.10**	.03
新奇性追求性	.02	.04	.06	.07*	.06	-.06	.02
損害回避性	.12**	.11**	.05	-.02	.12**	-.05	-.04
自己志向性	-.09**	-.08*	-.06	-.07	-.12**	.08*	.07*
協調性	-.06	-.05	-.08*	-.09*	-.10**	.07	.05

* $p < .05$, ** $p < .01$

本プロジェクトの中心テーマであるテレビ利用時間（接触時間：子どもが起きている居室でテレビがオンになっている時間、視聴時間：子どもが専念して、あるいは何かしながらもテレビを見ている時間）には、これまで報告してきたように（子どもに良い放送プロジェクト中間報告書，2010）、子どもの性別や出生順番、親のライフスタイルや親自身のテレビ視聴時間、外遊びや読書などの子どもの活動など様々な要因が影響を及ぼしている。表3では子どものパーソナリティ変数とともにこれらの関連諸要因を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示した。

表3 テレビ接触時間・視聴時間を従属変数とする重回帰分析 (N=894)

説明変数	接触時間 β	視聴時間 β
基本属性		
年齢 (月齢)	-.11**	-.11**
性別 (1=男子/2=女子)	.02	.00
出生順番	.08*	.09*
親関連変数		
母親の就労の有無 (1=有/2=無)	.03	.02
母親のテレビ視聴時間	.29**	.26**
母親のテレビ影響観 (1=悪い影響~5=良い影響)	.12**	.13
子どもの他の活動		
屋外遊び時間	-.10**	-.10**
読書時間	-.02	-.03
6歳時点のパーソナリティ変数		
新奇性追求性	-.00	.03
損害回避性	.08*	.08*
固執性	-.06	-.05
協調性	.02	.04
調整済みR ²	.17**	.16**

* $p < .05$, ** $p < .01$

注1) 固執性と自己志向性は高い相関関係 ($r=.83$) にあるため、解析には固執性のみを投入した

関連諸要因を投入した後でも有意な主効果が検出されたのは、パーソナリティの4つの特性次元（自己志向性については表注の通り、固執性と高い相関関係にあるため解析には投入しなかった）のうち、接触時間・視聴時間ともに損害回避性であった。ごく小さな値 ($\beta = .08$, $p < .05$) であるが、損害回避性の高さでテレビ利用時間の長さにも正の相関関係が認められた。Page と

Zarco (2001) の 3,307 名のフィリピンの高校生を対象としたテレビ視聴とシャイネス（恥ずかしがりやの程度）との関連を検討した研究で、長時間のテレビ視聴とシャイネスとの間に正の関連があることが報告されているが、シャイネスはTCIの損害回避性の主要な要素のひとつであり(対人的不安の程度)、年齢は異なるが今回の結果と類似したものであると考えられる。児童・思春期での対人不安傾向が自宅でのテレビ視聴とどのようなメカニズムで関連を持つのか、テレビ利用時間の個人差を検討していくうえで、今後検討していく課題のひとつとなることが予想される。

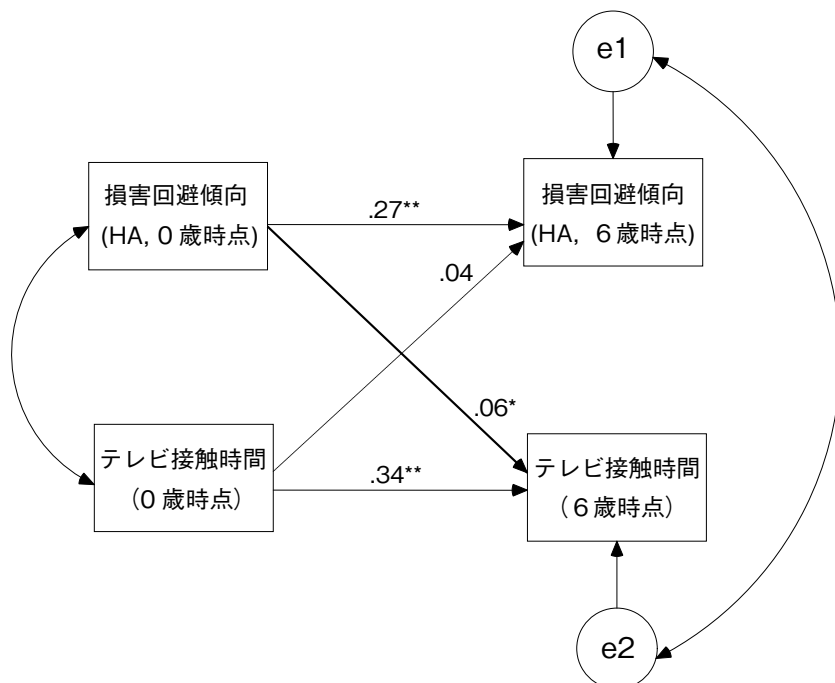
(3) 損害回避傾向 (HA) とテレビ接触時間との縦断的関連

(2) で報告した損害回避傾向とテレビ利用時間との関連について、その因果関係を推測するために、0歳時点と6歳時点での損害回避傾向およびテレビ接触時間を投入した交差時差遅れ分析を実施した。

表4 損害回避傾向とテレビ接触時間との縦断的関連 (相関係数、N=870)

	0歳損害回避傾向	0歳テレビ (接触時間)
6歳テレビ (接触時間)	.10**	.34**
6歳損害回避傾向	.27**	.08*

* $p < .05$, ** $p < .01$



(N=870, * $p < .05$, ** $p < .01$, CFI=1.00)

【図1】 テレビ接触時間と損害回避傾向との交差時差遅れ分析
 (* $p < .05$, **: $p < .01$, 破線は有意な関連がみられなかったもの)

図1より、0歳時点でのテレビ接触時間から6歳時点での損害回避傾向には有意なパスはみられず、0歳時点での損害回避傾向から6歳時点でのテレビ接触時間にごく弱いが有意な負のパスが観測された。テレビ接触の長さが損害回避性を強めるという因果の方向性ではなく、0歳時点から損害回避性のより高い子どもが6歳時にテレビをより多く接触している傾向があることを示唆する結果であると言えよう。

以上、今回の報告では子どものパーソナリティ要因とメディア利用時間との関連について探索的な検討をおこなった。ごく小さいながらもテレビの利用時間と人見知りや不安傾向に関する気質次元である損害回避性との間に有意な関連が観測され、その関連性はより幼少時の子どもの損害回避的な行動特徴が何らかのメカニズムによって後のテレビ時間を長めにする作用を有する可能性を示唆するものであった。今回はメディアの利用時間についてのみ検討をおこなったが、今後は、子どものパーソナリティ要因と子どもが好むコンテンツとの関連や、子どもの社会性や知的な発達に対するメディア利用との交互作用効果についても検討をおこなっていきたいと考えている。

引用文献

- 子どもに良い放送プロジェクト（中井・西村・菅原）（2010）『乳幼児期のテレビ接触を規定する要因～“子どもに良い放送”プロジェクト・中間総括報告書から～』（『NHK 放送文化研究所年報 2010』所収），295-325
- Sugawara, M., Sakai, A., & Maeshiro, K. (2000). Developmental psychopathology: A behavioral genetic approach. *Twin Research*, 4, 208.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.
- Constantino, J. N., Cloninger, C. R., Clarke, A. R., Hashemi, B., & Przybeck, T. (2002). Application of the seven-factor model of personality to early childhood. *Psychiatry Research*, 109, 229-243.
- Rentfrow, P.J., Goldberg, L.R., & Zilca, R. (in press) Listening, Watching, and Reading: the structure and correlates of entertainment preferences. *Journal of Personality*.
- Page, R.M., & Zarco, E.P. (2001) Relationship between television viewing frequency and scores on shyness among Philippine high school students. *Psychological Reports*, 89, 366-368.